

第2章

事前活動

第61回日米学生会議報告会および講演会	20
日米学生会議in広島および	
第61回日米学生会議説明会	20
日米学生会議in京都および	
第61回日米学生会議説明会	22
春合宿	23
英語ディベートワークショップ	26
お好み焼き教室	26
学生有志活動 サハリン訪問	27
防衛大学校研修	30
直前合宿	31

第2章 事前活動

事前活動とは

第61回日米学生会議の事前活動は、2008年12月の第60回日米学生会議報告会から始まった。新しい参加者が決まる前は、日米学生会議の存在を世に伝えるため、そして実行委員が運営経験を積むことを目的として行われる。参加者が決まった後は、講演会、レクチャー、コミュニケーション講座、英語ディスカッション、など多岐に渡る、本会議をより充実させるための諸活動を行う。また、本年は事前活動以外にも参加者の有志や昨年の学生会議参加者により、JASC PRESENTSやサハリン視察が行われた。本章では、これらの事前活動と有志の活動の様子を紹介する。

第61回日米学生会議 前年度の報告および講演会

【企画概要】

日程：2008年12月13日(土)

時間：13:30-16:30

主催：財団法人国際教育振興会

企画・運営：第60・61回日米学生会議実行委員会

場所：慶應大学三田キャンパス 西校舎519号室

【報告会内容】

慶應大学国際センターの後援の下、慶應大学三田キャンパスにて、第61回日米学生会議説明会を兼ねた、第60回日米学生会議報告会を行った。

【実行委員後記】

当報告会では第60回実行委員・参加者をパネリストに迎えたパネルディスカッション、第60回会議内容をサイト順に振り返ったプレゼンテーション、そして米国側・日本側参加者によるスピーチを行いながら、第60回日米学生会議を振り返った。日米学生会議への参加は自分のアイデンティティを再定義するきっかけになったと語る日系4世のアメリカ人参加者のスピーチの通訳をしながら私は、長い夏を共にした彼が心の中で考えていたことや抱えていた悩みについて初めて知った。同じ経験をしながらも、違った視点で事実を見て、十人十色の影響を受け

る。そんな日米学生会議内での多様性を実感した瞬間だった。

第60回の実行委員や参加者がそれぞれ日米学生会議への想いを語った後は第61回日米学生会議の説明及び質疑応答が行われ、撤収時間を過ぎてからも来場者と日米学生会議参加者との間で交流が続いていた。

報告会に出席するためだけに来日したというアメリカ人学生など、ひと夏を共に過ごした懐かしい仲間と第60回会議を改めて振り返りながら、そこで築かれた絆がいかに強固なものであるかを再認識し、第61回実行委員一同、自分たちが作り上げてゆく次の会議を大成功させたいとの想いを募らせながら、会場を後にした。(竹内友里)



▲新実行委員による61回会議の説明

日米学生会議 in 広島および 第61回日米学生会議説明会

日時：2008年12月23日 13:00-16:00

主催：JASC Presents

場所：広島市平和記念資料館 東館地下一階会議室
(1)

基調講演：広島市立大学 広島平和研究所
水本和実准教授

パネリスト：盛島正人(第60回日本側参加者)

川口耕一郎(第59回日本側実行委員長)

Joshua Schlachet (第60回米国側実行委員)

上野良輔(第59回日本側参加者)

モデレーター：渡辺恭子(第60回日本側実行委員)

テーマ：「若者たちのヒロシマへの多様な視点」

～世界からヒロシマへ・ヒロシマから世界へ～

担当：新宮清香(60)、渡辺恭子(59-60)、
Joshua Schlachet(60)

参加者：大井あゆみ(60)、竹内菜緒(59-60)、
平田加代子(60-61)、松田弘道(58-59)、
田中豪(60-61)、Jon-Michael Durkin(60-61)

基調講演：(水本和実准教授)

核兵器を安全保障の側面から見れば、その軍事的な価値が強調されるが、核廃絶の立場からすると、その道徳的な価値に焦点があたる。このように、一口に“核”といっても、その切り口は多様で、自分の立場からのみ議論していれば、違った立場の人と議論したときに、なかなか話がかみあわない。有機的な議論をしていくには、まず論点の整理が重要である。核兵器を論じるにも、国際法・危険性・被爆体験・核拡散・エネルギーなど色々な見方がある。

パネルディスカッション：

(沖縄出身の盛島正人)

米軍基地を抱える沖縄には、基地によって恩恵を受ける面と、害を被る面がある。両方の面に着目することが必要で、そのためには、当事者以外の視点を取り入れることが必要ではないか。戦争経験者の声があるとき、その声と対立しうような他の意見が出にくいという現状が沖縄にはあるような気がして、似たようなことは広島で起こっていないのか。

(9.11前後にワシントンD.C.に滞在していた川口耕一郎)

アメリカと日本の戦争教育や、学生の愛国心の抱き方は大きく異なっていることを、日米両国の教育を受けたことで痛感した。自分が通っていたワシントンD.C.の高校で退役軍人の方の講演を聞き、好戦的なことが話されたとき、スタンディングオーベーションをする多くの学生の中で、自分はその気持ちになれなかった。

(フルブライトの奨学生として鹿児島大学で研究中のJoshua Schlachet)

戦争の記念碑を作ることが重要である。広島が世界により強いメッセージを発信していくためには、被爆体験だけを強調するのではなく、多角的な視点から訴えていくことが必要ではないか。

会場との質疑応答：

「実際に被爆された方の意見とは違った話をしにくいのは事実かもしれない。でも、被爆された方の前で武力に賛成することは人としてできない気がするし、むしろ、積極的にしたくないと言えるのかも」というパネリストに対する明確な反論や、「広島での戦争教育は、被爆者の視点しかなく、アメリカ側の視点は欠けているのかもしれない」という意見、あるいは、「平和運動の中での、広島の強みは何か」というパネリストへの質問など、パネリストと会場の双方向的な意見交換があった。

パネリストを経験して：(海上保安大学校に在学中の上野良輔)

広島の方々とは、ヒロシマや核兵器について、様々な側面において考え方や捉え方が異なるということを感じました。また、広島は原爆の攻撃を受けた都市であり、原爆の被害に遭われた方々が御存命であるので、これらの問題について議論する際には細心の注意を払う必要があることも再認識しました。しかし、国際社会は日々変化し、新たな問題が顕在化していることも事実です。それらの問題について、現実を踏まえて、より具体的な議論をしていく必要があります。そのためには、お互いの立場を尊重し理解した上で、現実に即した形で議論し、そのレベルを向上させていかなければなりません。そのためにも、今回のシンポジウムのような場を今後も継続していければと思います。

※フォーラム直前の12月18日中国新聞朝刊地方面に紹介記事が掲載され、当日の様子は23日午後6時のニュースでは中国放送とテレビ新広島に、午後7時ニュースではNHK広島に、と放送局3社に取り上げ

第2章 事前活動

ていただきました。また翌日の24日の朝刊では中国新聞、毎日新聞、朝日新聞、読売新聞の4社に取り上げられ、前者2社は写真付きで大きく掲載されました。

日米学生会議 in 京都 および第61回日米学生会議説明会

日時：2009年1月9日 14:00-17:30

主催：第61回日米学生会議実行委員会

場所：立命館大学衣笠キャンパス中野記念ホール

テーマ：「新たな日米関係をめぐって」

～大統領選後の日米と国際社会のゆくえ～

基調講演：在大阪・神戸米国領事館Edward Dong
総領事

パネリスト：廣田隆介(慶應大学法学部4年、第60回
日本側実行委員)

坂本朋美(京都大学大学院農学研究科博士課程1
年、第60回日本側参加者)

Jon-Michael Durkin (University of Akron,
Junior) (第61回米国側実行委員)

モデレーター・通訳：伊関之雄(京都大学経済学部3
年、第60回日本側実行委員)

参加、準備：真田雄太(58)、今矢涼子(60)、

比嘉慎一郎(60)、平田加代子(60-61)、

小野元(60-61)、松本秀也(60-61)、

Catherine Simes(60)、Robert Cooper(60)

日米学生会議に参加した1ヵ月を、どうその後につなげていくか——これは支援してくださっている方々からもきかれることで、また参加者一人一人が模索するものでもあるのではないかと。1月9日に立命館大学にて開催された日米学生会議in京都ならびに第61回日米学生会議説明会は、そのひとつの答えといえるかもしれない。このイベントは、「日米学生会議の議論を、本会議が終わった後も、特に地方で続けていくことで、JASCの一つの目標である社会発信を目指そう」という昨年夏の参加者の呼びかけではじまった企画「JASC Presents」の第2弾ともなっていたからである。

このようなイベントが開催できたのは、会場を貸していただいた立命館大学国際課、基調講演を快諾してくださったドン総領事、会の様子取材してくださった立命館大学広報部ならびに関西学生報道連盟の方々、試験期間間近の授業のある平日に会場に足を運んでくださった40人以上の皆さん、遠くは東京やニューヨークから運営を手伝いに来てくれた日米学生会議スタッフ参加者など、多くの方々のご厚意、ご協力があったからだ。この場を借りて、改めて感謝申し上げる。

さて、簡単にイベントを振り返ろう。

当日はまず在大阪・神戸米国総領事のエドワード・ドン氏が「新たな日米関係をめぐって～大統領選後の日米と国際社会のゆくえ」というテーマに沿った基調講演を行った。ドン総領事は「偽」や「変」といったネガティブなイメージが続いたここ数年の「一年をもっともよく形容する漢字」の話題をとりあげ、オバマ氏の当初のスローガンhopeにちなみ、新大統領の就任は、「望」という漢字で形容されるような一年を導くという期待を示した。また、日米関係の安定を好意的にとらえる一方で、日本側も米国側の政策に対して意見するような関係を望むと注文をつけた。

会場との質疑応答では、米国の対東アジア政策などについて活発な質問がとび、総領事はその一つ一つに丁寧に対応していた姿が印象的だった。



会の後半は、第60回日米学生会議参加者による発表と総領事・学生・会場の皆さんの三者を交えたディスカッションが展開された。

まず廣田隆介さん(慶應大学法学部4年)が「バイオエタノールから読み解く日米の役割」と題して、米国のバイオエタノール政策が大量消費型社会の構造を温存させ、エネルギーと食糧の問題を密接に関連付けてしまったことや、日本がトウモロコシを含めた多くの食糧を輸入し廃棄している点を指摘し、日米両国の市民の意識の問い直しをもたらす効果は大きいのではないかと主張した。

次に坂本朋美さん(京都大学大学院農学研究科博士課程)が環境分野における日米の役割について、特に森林の違法伐採を取り上げ、日米国内ほど法整備が進んでいない途上国で違法伐採された材が日米両国に流入し、国際価格の低下が自国林業にも打撃を与えていることなどから、日米が主導的に国際的な森林保護に取り組むべきであり、また中心的な役割を果たしうることのべた。

最後にJon-Michael Durkinさん(University of Akron)が、伊関之雄さん(京都大学)の通訳を介して、日米の自動車産業とその環境にやさしい技術の導入状況を分析し、積極的に環境保護を進めていく必要性を指摘した。

ーパネリストからは以下のコメントをもらいましたー

直前までビラを配ったことが功を奏したのか、会には多くの来場者呼び込むことができた。参加者は皆熱心に話を聴いてくれ、質疑応答も比較的スムーズに進んだと思う。会終了後には来場者と話す時間もあり、日米学生会議に興味はあるが英語力に自身がない、専門知識を持っていないなど、私がJASCに応募する前に抱いていたのと同じ心配を口にする学生らに、去年の自分が重なった。自分の経験をもとに大いに激励したつもりだが、彼らが申し込みという初めの一步を思い切って踏み出すきっかけになっていれば本望である。

(京都大学大学院農学研究科 坂本朋美さん)

会場との討論では多くの鋭い質問を投げかけられて正直たじろぎましたが、精一杯のお答えはできたと思います。しかし、時間の関係上会場とパネリス

トとの「議論」にまで発展しなかったことは、今後の改善点だと思います。今後は是非、来場者の方がパネリストの発表や意見にチャレンジし、議論が発展するような展開があると良いと思います。最後に、学生最後の年にこうして自由に意見を表明できる場を与えてくれた日米学生会議に感謝したいです。この京都JASC Presentsをきっかけとして、関西圏から未来のJASCer、そしてパネリストが一人でも多く出てきてくれることを願っています。

(慶應大学法学部 廣田隆介さん)

春合宿

5月2日～5月4日にかけて、代々木オリンピックセンターにて第61回日米学生会議春合宿が行われた。この合宿は、会議参加者が初めて顔を合わせる機会でもある。第61回会議の概要説明や自己紹介、アイスブレイキング、コミュニケーションワークショップや留学生との英語ディスカッション、アルムナイの方々を招いてのレセプション、分科会セッションや講演会など、2泊3日という短い期間でありながらも盛りだくさんの内容となった。それまで顔さえ知らなかった参加者も、合宿を通じ親交を深め、各々が本会議にむけての意気込みや目標を抱き、帰路についた。

● デイナーレセプション「ようこそ先輩」

さまざまな世代の日米学生会議参加者・実行委員の方々を招いて立食パーティーおよび、グループになつての交流会を行うのが本企画の概要である。本年度で75周年を迎える会議には、様々な先輩がいる。4時間余りのレセプションであったが、50名を超える沢山の先輩方に参加していただき、有意義な時間を過ごすことができた。OBひとりひとりのJASCでの体験や、現在のお仕事について伺う中で、第61回の会議参加者は「JASCとはなにか」「JASCが人生においてどのような意義を持つのか」等考える機会を得る。レセプション終了後の参加者たちは、先輩方からの刺激と夏に対する期待で興奮しているように見えた。

(松尾恵輔)

第2章 事前活動



▲OBとの座談会を前に緊張した面持ちの参加者たち

● 留学生との英語ディスカッション

このセッションでは参加者にとって、留学生との議論をすることによって各々がそれなりの課題点を把握する上でとても大切なものであった。まず初めにお互いの自己紹介から始まり、その後分科会ごとに分かれて1時間程度議論をした。分科会では春合宿始まって以来初の英語ディスカッションだったので、英語で自分の意見を伝えることの難しさはきっと誰もが感じたと思う。その後は場所を移動し、外国人学生との立食パーティーを楽しんだ。その時に参加者でも分科会の事を話し合う人、マジックを見せて楽しませている人などいろんなコミュニケーションの方法を肌で感じて、それだけでも学ぶことが多々あった。3ヵ月後に向けて、自分に何が必要で何が足りないのかを考える点でもこのセッションは大切だったが、なによりも異文化の人と話しそれ



▲留学生とのディスカッション

を理解することの楽しさを感じ取れたのは私にとってとても貴重な機会であった。(高橋央樹)

● Communication Workshop

講師：小田康之氏

講師としてVital Japanより小田康之氏をお招きし、日本側参加者の為のコミュニケーションワークショップが行われた。日本で暮らし、日本の文化に慣れ親しんでいる我々は、我々にとっての「常識」が、日本人にとっての「常識」にすぎないということを自覚する機会はその多くはない。海外経験がない、もしくは日本以外の国の人と接する機会が多くないという者にとっては尚更である。主に挨拶の仕方や、握手の意味などをご教授いただいたが、文化圏の違う人々の持つ習慣や常識について学び考えるということは、単純な誤解を避けるだけに止まらない。他者を理解しようとする姿勢は、一つの価値観に捉われない多角的な視点を持つことや、人間関係の根底を成し、集団生活において不可欠な思いやりや優しさにも繋がるということを強く感じた。夏の本会議に向け、実用的なコミュニケーション方法から、コミュニケーションそのものについて考える良い機会となった。(谷口貴大)

● 春合宿に参加して

春合宿は私にとって大きな衝撃だった。

初めて会う、第61回の日米学生会議参加者36名に私は大きな刺激を受けた。志の高さ、機転の早さ、分科会のメンバーのレベルの高さ、今までだったら他愛もないと感じられる一人一人との会話の中に、参加者の中からは常に新しく学ぶものがあつた。参加者は、みな一つの小さな会話のボールをどんどん自分の考えをもって膨らませていく能力を持っていた。

春合宿を経て、深い考えをすることが出来、たくさんの知識をもっている人に出会い、大変な場所に入ってしまったなと感じた。しかしそれと同時に、この初めて入る環境にとっても魅力を感じ、私も彼らのように引き出しを増やしてみなのようになりたいと思った。また、知的な参加者、優秀な学歴をもつ

ている皆ではあるが、これからの目標がまだ定まっていな参加者、これから頑張らなくてはいけないと感じている参加者と出会い話すことで、皆を目標にするとともに、共に本会議に向けて頑張りたいと強く感じるようになった。(加藤梓)



▲参加者同士の自己紹介の一幕

●春合宿一言感想

【浅野泰史】一言で表すと、楽しかったに尽きる。

人との出会い、挑戦すべき課題、尽きることのない議論。すべてが刺激的で、すべてが新鮮で、すべてが五感を奮い立たせる。本会議が楽しみである。

【安藤歩美】春合宿が終わり、このたった3日間の、濃密な議論と志の高い仲間達との出会いがもたらした自分の変化に驚いている。そんな自己の化学変化を楽しみつつ、来る夏を一回り成長して迎えたいと願う。

【飯沼瑤子】春合宿では、夏の本会議に向けて、日本側のメンバーと交流をする機会を事前に持ったことで本会議への期待やモチベーションがすごく高まった。

【衣袋聡】一番の収穫は、自分達は今年無限の機会と接することができるという希望を持つことができたこと。先輩方による歴史と伝統に私達61期も何か残せるように精一杯頑張ろうと思いました。

【梅本勇基】JASCerに選ばれてから待ち焦がれていた春合宿。JASCでは様々な熱い議論が行わ

れ、自分の世界を広げることができる。この機会を活用できるか否かは自分にかかっている、そう感じた春合宿だった。

【大谷翔】メンバーそれぞれの光る個性に魅了され続け、来る日米学生会議を期待させる春合宿でした。「主体性」という実行委員からの言葉が特に印象的で、僕も積極的な関わり方をしたいと思います！

【大西すなほ】実行委員会のメンバーは箱は提供してくれるけど、中身をどう埋めるかは参加者一人一人次第と聞いた時に、夏迄の3ヶ月をどう過ごすかも本番と同じ位重要かもなと思いました。

【大宮透】「このメンバーとなら素晴らしい時間を過ごすことができる！」

そんな確信を持た3日間。だからこそ、最高の会議を作り上げるために自分のすべきことをしっかりと実行していきたくと思った。

【緒崎裕香】春合宿は、喋って喋って飲んで考えて遊んで考えて喋った3日間。今までIsolated Crazy Utopiaの限られた世界で生きていたので、ここで出会った皆との関わりは面白くて刺激的。夏が楽しみです。

【坂田奈津希】JASCの第一印象は「濃い」！「濃い」メンバーに「濃い」内容。自分の「薄さ」に不安を感じるが、すべてを吸収しながらこれから「濃く」していきたい！と前向きに考えている。

【笹岡祐衣】1人で東京に行くのが初めてだったから、JASCに対する思いより、オリセンに無事着けるのかの方が心配だった。でも今は3日過ごただけだけど、JASCへのいろんな気持ちでいっぱい！！

【神馬光滋】実行委員になり、はや7ヶ月。待ちに待った28名との初集合。企画を直接発信できる場所の出来た喜びと、集まった人間の素晴らしさに感動。モチベーションアップの春合宿となりました。

【杉本友里】素敵な仲間との出会い、刺激的な議論…全てに「圧倒」された3日間だった。自分の課題に向き合いつつも、夏には2倍の仲間と10倍

第2章 事前活動

の時間を過ごすと思うと、期待と興奮で胸が高鳴るばかりだ。

【高田修太】春合宿では、はじめて英語で留学生と会話し、OBOGと交流し、そして61stJASCersとも出会えて、非常に良い意味でショックを受けました。それと同時に今年の夏が非常に楽しみになりました。

【高橋央樹】春合宿参加まで、本当に自分が溶け込めるか不安だったけど、終わってみればすごく楽しかった。日に日にすんなりみんなと話ができたと、自分にはまだまだ知らない世界があると改めてびっくりした。

【中村誠一郎】人と仲良くなるのに時間には関係ないのかもしれない。そう僕に思わせたのがこのJASC春合宿だった。合宿を終え、今出来ることを精一杯にやり通そうと思いつつ、帰路に就いた。

【中村真理】英語ディスカッションでは隣にいたJMDが肩を叩いて励ましてくれて、皆の優しい言葉に、こんなに温かい場所に来られて本当に良かったと思った。私が成長することで61回をより最高のものにしたい！

【中村梨紗】春合宿。それは「これから何か物凄いことが起こるかもしれない。」という思いが、「これから何か物凄いことを起こしたい。」に変化した3日間。

【西野緑】春合宿はたった二泊三日だったが、十二分に刺激的だった。なんでって、ここまで情熱的&キャラの濃い学生の集まりに初めて出くわした気がするから。本会議に向けて良いスタートを切れたと思う。

【野津美由紀】ようやく皆と対面し、とにかく「安心」しました。予想に反して、とてもまったりとした雰囲気、初対面でも沈黙が気にならない、そんな居心地の良い集団でした。モチベーション急上昇！

【林藤彦】こんな面白いメンバーが集まったらそりゃ面白いことが間違いなく起きると確信！まじ早くまたみんなに会ってゆっくり話をしたいわ～^^

そしてECのみんな、準備本当にありがとう！

【安川皓一郎】JASCのような団体の参加は初めてであったが本当に充実した時間を過ごせた。今期のチームの結束を高めるとともに、歴史ある団体の一員になるにあたっての心構えを学ぶことができた。

英語ディベート教室ワークショップ

日時：2009年5月23日

場所：ココデシカ

講師：井上敏之氏

ネーティブアメリカン学生との議論に備え、論理的に意見を伝えるための訓練の一環として日米学生会議の先輩で(有)スピーチディベート研究所代表取締役である井上敏之先生による、ディベートワークショップが開催された。

効果的に自分の考えを伝えるためのPoint (結論)、Reason (理由)、Example (事例)、Point (結論)というPREP構造を意識しながら一対一のスピーチ練習を行った後、3、4人ずつのチームに分かれ、実際のディベートルウンドを行った。『マクドナルドの世界展開を推進すべきである』、『AIBOは本物の犬より優れている』、『ウサギはカメより優等である』の3題について肯定派/反対派に分かれ、参加者は『とにかく実践を通して学びなさい』という井上先生の言葉通り習ったばかりのPREP構造を早速取り入れながら独自性とユーモア溢れる議論を繰り広げていた。

お好み焼き教室

日時：2009年7月10日(金) 13:00-17:00

場所：オタフクソース株式会社、東京支店

【活動内容】

オタフクソース株式会社様に「お好み焼き教室」を開催していただいた。同社社員の吉田裕章様に、本年度のJASC参加者7名が、広島風お好み焼きと大阪風お好み焼きの焼き方を教えていただいた。お好み焼きは美味しいだけでなく、料理する過程から

楽しみがある。第60回会議の際も同社に提供いただいた材料を素に、日米の学生が協力してお好み焼きを作り親交を深めた。この教室は、そんなお好み焼き作りを通しての交流を今年も日本で成功させたいかと言う思いから、お好み焼き作りの研修を受けるべく開かれた。

教室では、キャベツを切り方からトッピングの仕方にといたるまで、お好み焼きの作り方を丁寧にお教えいただいたあと、作ったお好み焼きを実際に食べることも出来た。参加した学生の一人は「おいしいお好み焼きが自分でも作れることに驚いた。本会議でも是非アメリカの学生にこの料理を伝えたい。」と述べていた。(松尾恵輔)



▲OBの井上さん、岩崎さんと参加者の一枚

学生有志活動 サハリン訪問

日程：2009年7月4日(土)－7月7日(火)

主催：第61回日米学生会議実行委員会

協力：ITC Aerospace、サハリン航空、
サハリン国立総合大学、サハリン州政府

【サハリンへの道】

実行委員会発足当初より抱いていた、「日米で世界に出来ることは何か」という問いかけ。或いは日米学生会議が創設されたときから、創始者の気持ちの上ではあったのであろう、凡そ75年前、日米の学生で満州へ赴いたことがあった。この事が、75周年の会議を迎える実行委員会の中では、1つのテーマ

として、発足当初の2008年9月から、脳裏に浮かんでいた。

日米学生会議には、アルムナイのご厚意により、定期的に開催されるSalon de JASCという会がある。80歳を超える方から現役の学生まで、参加者は様々であるが、世代を超えた率直な意見交換の場として、年に4回程開催されている。

キッカケは年明けのSalon de JASC。とあるOBの方から「サハリンに行ってみないか」というお声がけをいただいた。委員長松本の答えは、迷うことなく”YES”。しかし実現可能性については、甚だ確信を持たずに、その場を過ぎた。サハリンに行く意義について、その後実行委員会内での議論が行われ、本会議前の段階で行くことの是非について、主に意見がなされた。また実現可能性が見えない中で、半ば夢を見るような空虚な議論は、いたずらに時を費やすのみで、無駄である、諦めるべきであるという意見もあった。しかしながら冒頭にもある、日米学生会議の視野拡大という点において、サハリン州に出向き、現地の学生と意見交換し、日本とロシア、米国の関係について、学生が率直に意見交換をする場は、非常に意義深いことであると感じていた。

そんな中、世界の抱えるエネルギー問題はじめ、サハリン特有の在サハリンの二世・三世の方々との意見交換という企画が持ち上がった。それら全ては、日米学生会議として、日米を超えた国・地域の価値観や現状を踏まえた上での議論及びその考察を本会議に活かせたらという気持ちがあった。

このサハリン訪問に際して、多くの方々にご協力いただいた。Salon de JASCで話をし、そこから実現までの一部始終を見守り多大な貢献をくださったITC AeroSpaceの中山智夫様、サハリン航空の方々をはじめ、多くの方に企画の説明、ご提案、協力要請に伺った。JASCでは多くの場で社会と接し、協力を仰ぐことになるが、サハリン訪問は日米学生会議にとっても稀な国外研修であり、その機会を与えてくださった皆様に、この場をお借りして、感謝申し上げます。有難う御座いました。

(松本秀也)

第2章 事前活動

【サハリン渡航】

7月4日

羽田空港に集合した後、新千歳空港へ。胸を含ませながら空港で待つこと数時間、遅れていた飛行機がやっと空港へ到着し、一同サハリン州ユジノサハリンスク空港へ向かった。夜遅く空港へ着くとサハリン航空の方々が出迎えて下さった。日本国内とは一風違った景色をバスの中から眺めながらホテルへと向かい、その夜は素朴なロシア風デザインの毛布にくるまれながら眠りについた。（竹内友理）



7月5日

軽い朝食を食べた後皆でひとつの部屋に集まり、勉強会を行う。事前に下調べをしてきた担当学生が順番にサハリンの歴史や日本との繋がり、エネルギー問題、サハリンIIプロジェクト等について発表を行い、意見交換をした。ガイドブックだけでなくチェーホフの「サハリン島」を読んでくるなどしっかり事前勉強をしてきた学生もあり、それぞれのイメージをもってサハリンへ来ているようだった。

この日はサハリンという土地やそこに住む人々の暮らしをより間近でみるべく現地の方の案内のもと、街へ出た。日曜日であったため幸運にもミサに参加することが出来、熱心なキリスト教徒が多いサハリン住民にとっての休日の朝を体験する。ロシア正教では教会に入る前に女性は皆頭をスカーフで覆う習慣があるため裸の長黒髪が特に目立ち少し恥ずかしくなりつつも思い切って足を踏み入れると、こじんまりとした教会いっぱいのサハリン住民の方が鳴り響くオルガンに合わせて聖歌を歌っていた。イ

エス・キリストの前で拝跪し足にキスをする女性の姿、大きな皿に寄付金を集めて歩く男性。何もかもが新しい。

その後は近くのサハリン州立郷土博物館へ。昭和13年に日本の城郭を模して建てられたという日本時代の樺太庁博物館の建物をそのまま活用しており、サハリンの町並みの中でも一際目立っている。中へ入れば説明の表記は全てロシア語だったが、日本時代の軍服や大砲を見ると少し複雑な気持ちになる。すっかり東欧の香りがするサハリンの中で、確かに日本とサハリンの間の歴史的つながりを実感できる場所だった。

ミニバスを一時間半ほど走らせ、コルサコフのプリーゴロドノエ村へと移動した。サハリンIIの天然ガス積立基地付近の丘の上へ上ると、明治38年に日本が日露戦争で勝利を収めた後、日海兵隊が樺太上陸した際に立てた記念碑があった。「遠征軍上陸記念碑」と刻まれたその石碑はもう垂直に立ってはおらず、地面に倒れた虚しい記念碑の残骸が高い雑草に被われていた、といった方が正しいのかもしれない。何十年も前に日本軍が喜びを分かち合いながら記念碑を立て、そのまた数年後に誰かが憎しみや怒りを感じながらその記念碑を倒したまた数十年後、私達日本人の学生はその場所で笑いながら昼食のサンドイッチを食していた。目線の先には日本企業も深く関わっているサハリンIIプロジェクトのLNGプラントが見える。過去と現在を同時に感じられる場所だった。



◀倒れた「遠征軍上陸記念碑」



プラントを背に▶

昼食後はミニバスでLNGプラント内を通り抜け見学した。巨大な液化施設。日本企業から配属された多くの日本人が住んでいたという、まるで拘留所を思わせるようにずっと先まで続く画一的な宿泊所。実際に企業が活動する末端の現場を見る機会が少ない私達学生にとっては特に貴重な経験となった。もう少し車を走らせサハリン州最大の不凍港であるコルサコフ港を見学し、帰路についた。

(竹内友理)

7月6日

現地大学生との交流企画のため、サハリン州立大学へと向かった。日本語学科の先生と学生に連れられ大学内の施設見学をさせて頂いた後、大学ホールでセレモニーが開始された。サハリン州立大学生の司会と学長、学部長等御同席のもと、記念品の交換、日本・サハリンについてのクイズ企画、そして学校教育についての意見交換を行った。経済が低迷し就職が厳しくなっている現在、学生が抱える悩みは似ているようであるが、「自分は本土へは行かずに出来ればサハリンに残りたい」という学生が予想以上に多かったことに驚いた。最後にサハリン州立大学生によるプチコンサートが開かれ、セレモニーは幕を閉じた。



大学の食堂でロシア風の昼食を頂き、夕方からは総領事館の表敬訪問、北海道庁サハリン支局の訪問を行い、サハリンにおける日本企業や政府の活動について伺った。参加者のうち数名は更にサハリン残留日本人／二世の方々とお会いし、数十年もの間

に大きな変化を遂げてきたサハリンを間近で、複雑な立場から見てこられた方々のお話を伺う機会を頂いた。国境や国籍という人工的な概念が本当に人の人生を苦しめることがあるのだということを感じさせられるとともに、日本人としての自分たちの立場について改めて考えさせられた。

長い一日の締めくくりは、日本食料理店での昼間出会ったサハリン州立大学生との懇親会。美味しい日本食料理を食べながらよりインフォーマルな空間で相互交流を深めることが出来、夕食後も別れが言えずに長い間、列を成して夜のユジノサハリンスクを散歩していた。

(竹内友理)

7月7日

帰国日のこの日はチェックアウトをした後、スーツ姿で最後の訪問地であるサハリン政府内のCommittee for International, Overseas Economic & Interregional Relations of the Sakhalin Regionへと向かった。

帰りの飛行機の中では笑いが絶えず、共にこの貴重な経験を共有できた仲間との間で確かに親交が深まっているようだった。

(竹内友理)



【参加者感想】

Kayoko Hirata

Also familiar to the Japanese as “Karafuto,” the elongated island of Sakhalin lies off the eastern coastline of mainland Russia and above Hokkaido. With its long history as a formerly disputed territory between Japan and Russia,

第2章 事前活動

it is a place shrouded in conflict and mystery. In early July, twenty members of the 61st JASC had an once-in-a-lifetime opportunity to travel northbound to this remote island to learn about its Japan-Russia relations.

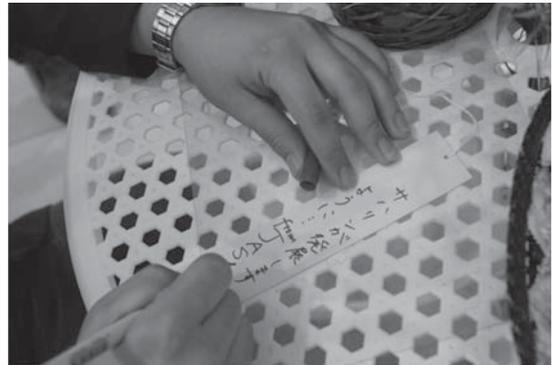
Perhaps during the former socialist period, the region flourished and the capital bustled with people. However, after touring the city, we realized that this place has not been able to sustain under the pressure of capitalism and globalization. Although the oil and gas projects in the northern regions have flourished thanks to the investment by companies such as ExxonMobil and Gazprom, we were skeptical of the enthusiastic promises of economic development made by our tour guides.

Walking down the wide and eerily empty streets, there remain some traces of Japanese city planning, with the Kyoto-esque grid patterns. But mostly, the city is overshadowed by the strong presence of Soviet planning, seen in the Stalinist styled buildings lining the streets. Despite the burning of the city by Russian troops after WWII, there remains a few structures from the Japanese colonial era, such the old Karafuto government building, renovated to house the Sakhalin Regional Museum, the fallen Russo-Japan war monument in Korsakov, and what little remains of Karafuto Shrine. Most have been silently abandoned to disintegrate with time.

The people of Sakhalin were extremely hospitable people, eager to present their unique culture and learn about ours, however during our stay, I felt a sense of weariness from the place. True, Sakhalin is officially Russian territory, but it seems divorced from the activities of Moscow. Who knows what will happen to the island once the natural oil resources run out. But the trip was a remarkable eye-opener to learn about the development of a post-Japanese colony and a pre-

Conference opportunity to become acquainted with our delegates. Thus concluded our trip to Sakhalin, where we parted from our new local friends with promises to meet again in the future.

Thank you very much to our local tour guides, the students at Sakhalin State University, the Russian and Japanese government officials, and to our kind sponsors for making this extraordinary trip possible.



▲また会う日まで！

防衛大学校研修

日時：2009年6月19日(金)

会場：防衛大学校(神奈川県横須賀市)

概要：一斉昼食、課業行進見学、施設見学

講義：「日米関係と安全保障」太田文雄 安全保障・危機管理教育センター長 分科会ディスカッション、レセプション

私たちは、今後日本の防衛に直接関わってゆく同世代の学生と、日本における安全保障システムの実情について話し合うことが、会議においていかなる日米関係や国際政治の問題点を論じる際にも有意義であると考え、この研修を実施した。課業日であったにも関わらず、本年度も研修が実施できたのは、防衛大学校の全面協力があったからである。講義では、米国の安全保障にとっての日本の存在はどんな意義があるのか、日本が米国ぬきでの安全保障体制を構想することは現実的か、など率直な質問が飛び

出し、防衛大独自の現実的視点から丁寧に答えていただいた。分科会議論では、テーマを掘り下げられ、米国側との議論の手がかりをつかんだとの声が多く聞かれた。研修終了後、見送りにきてくれた防衛大生との別れを惜しむ参加者を見て、短時間ではありながら双方の学生が絆を育んだことを実感した。



▲懇親会での一枚

直前合宿

日時：2009年7月26日(日)－28日(火)

場所：代々木オリンピックセンター

期待と不安が交錯する中、日本全国から第61回日米学生会議の参加者たちが集結してきた。まだ全員が全員を知りきっていない状況ではあったが、再開の歓びで部屋が溢れ、松本実行委員長長の挨拶により直前合宿が始まった。合宿に関する諸注意の後、日米学生会議事務局長である伊部正信様から激励を頂き、ユーモアに溢れているながらも、本質的なお話を36名の日本側参加者は真剣な眼差しで聞いていた。その後は実行委員8名が「日米学生会議に対する思い」を語らせてもらう時間を頂き、諸々の事務連絡や東京サイトで行うスキット練習を経て皆で夕食を食べた。19時からは「自分にとっての日米学生会議」という対話セッションを設け、参加前の心意気や、そもそもの参加動機、期待しているものや、会議の意義などを共有した。

翌日、ラジオ体操に始まり、米国側参加者の歓迎

企画準備を野津美由紀の指導により行った。米国側を日本に歓迎することが目的でありながら、副作用として、実行委員を含まない参加者主体によるこの活動により、互いをより知り、結束する機会になったようにも思う。その後には英語の口語的表現を紹介するなどして、夕食後には株式会社ビズリーチ代表取締役の南壮一郎様に講演をして頂いた。南様は高校卒業後、単身米国タフツ大学に留学するが、まだ大学での海外留学が一般的でなかった時代に、自分の価値観とセンスで未来へと挑戦していった度胸に敬服する。講演では本質をとらえることの重要性を軸にお話頂き、米国側参加者が到着する前夜であったにも関わらず、多くの参加者が夜遅くまで「本質」について語り合っていた。

【参加者日記】

7月26日

36人のジャパデリ達は重そうなスーツケースを引きずりながら、次々とオリンピックセンターに現れた。そして全員が、春合宿ぶりにひとつの部屋に揃う。

一いよいよ、日米学生会議が始まってしまったー。

今日は挨拶や激励、諸注意などの初日の一連の行事の後、ECが一人一人「自分にとっての日米学生会議」について、考えを発表した。そして夕飯後は参加者全員が少人数のグループを作り、一人ずつこの問いに答えていった。この会議に参加した理由は何か。この会議を通じて、自分は何を成し遂げたいのか…。私には二日後にアメデリが到着することへの不安があった。だがこの議論で自分の目標を再確認でき、他のデリたちの会議に懸ける想いを聞いたことで、臆病にならずに挑戦していこう、と会議に向けた覚悟を持つことができた。

くたくたに疲れてベッドに潜った初日の夜中。アメリカ人には負けないぞ、と密かな闘志を抱いて、眠りについたのであった。(浅野泰史)

7月27日

日本側参加者の36人みんなでラジオ体操をして始まった一日は、(株)ビズリーチ代表取締役の南壮一郎氏による講演で締めくくられた。

第2章 事前活動

この講演のキーワードは「とにかく動くこと」にあったように思う。アクションを起こせばその分だけ失敗するかもしれないが、成功するかもしれない。だが、もしアクションを起こさなければ成功する可能性すらない。失敗をすることのリスクを考えている方が、時間の無駄であり最も大きなリスクである。これまでにいくつかの大きな人生の岐路を経て、その度に自分が心からやりたいと思うことは何かを考

えて選択をしてこられた南さんの言葉には迷いが無く、生き生きとしていたのがとても印象的だった。

翌日からやってくるアメリカ側参加者たちと合わさった72人で、どれだけアクションを起こせるか。その中で自分はどんなことに挑戦できるだろうか。これから始まる1ヵ月に対するモチベーションが高められた一日となった。
(安藤歩美)